

# SLAVIC-EURASIAN RESEARCH

CENTER NEWS No. 152 February 2018

## 研究の最前線

◆ 2017年度冬期国際シンポジウム ◆  
《ロシア革命と長い20世紀》開催される



セッションの様子

センターは2017年12月7～8日に、冬期国際シンポジウム「ロシア革命と長い20世紀」を開催しました。これは、科

センターは2017年12月7～8日に、冬期国際シンポジウム「ロシア革命と長い20世紀」を開催しました。これは、科  
研費基盤研究A「比較植民地史：近代帝国の周縁地域・植民地統治と相互認識の比較研究」（研究代表：宇山智彦）と共同利用・共同研究「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・



エクスカースンで訪れた「北海道開拓の村」にて

東欧）を中心とした総合的研究」の支援で実現しました。シンポジウム前日の6日には、後者の「近現代の中央ユーラシアに関する共同研究班」の成果の一部として、長沼秀幸さん（東大・院／日本学術振興会）が、「長い20世紀」に先立つ帝国統治の暴力性を地域横断的に考察する

刺激的なワークショップ「戦争と社会秩序の変容：ロシアによる中央アジアとコーカサスの征服」を企画しました。  
シンポジウムは、第一次世界大戦と十月革命に起点を置く「短い20世紀」ではなく、19世紀末の帝国主義とそれに対抗する民主主義的理念の拡散も含めた文脈に、ロシア革命を位置付けることにしました。それによって、反帝国主義や民族自決など「解放の夢」に魅了された人々の協力、交渉、競合、衝突が「長い20世紀」を形作ってきたことが明確になりました。また、オス

マン帝国、イラン、南アジア、中国、イギリス帝国の専門家をお招きすることで、ロシア史研究者からは見えにくいロシア革命とソ連の周辺世界に対する衝撃をより深く捉えることができ、いわば「革命ロシアのトランスナショナルヒストリー」を実現できました。2日間の延べ参加人数は130名（うち外国人43名）で、議論は大いに盛り上がり、今後発展させていくべき研究のヒントが盛りだくさんでした。パネリストおよび関係者の皆様に深く御礼申し上げます。[長縄]

◆ 北極域研究推進プロジェクト（ArCS）の国際シンポジウム開催される ◆



ディスカッションのようす

2017年12月11日から12日にかけて、北海道大学百年記念会館で国際シンポジウム「北極域の環境・開発・国際関係」（International Symposium on Environment, Development and International Relations in the Arctic）が開かれました。本シンポジウムは、北極域研究推進プロジェクト（ArCS: Arctic Challenge for Sustainability）が主催し、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターと北極域研究センターの共催でおこなわれました。

北極海と接する最も長い海岸線を持つロシアは、近年の地球温暖化を受けて注目の高まる北極域でも鍵を握る存在と言えます。いっぽう日本は、2013年5月より、北極の代表的な国際組織である北極評議会（AC: Arctic Council）にオブザーバー国として参加しています。本シンポジウムでは、世界的に活躍する北極域の研究者を交えて、今後この地域における問題に具体的な関与を深めていくためには何が求められるかを議論することを目的として企画されました。

シンポジウムを主催したArCSは、文部科学省の補助事業として実施されている、我が国における北極研究の基盤プロジェクトです。その実施メニューの一つ、テーマ7「北極の人間と社会：持続的発展の可能性」は、人文社会科学の研究者を中心に構成される研究事業で、1) 北極域の経済開発、2) 環境と人間のインタラクション、3) 北極域のガバナンスを三つの柱として推進されています。本シンポジウムは、この三本の柱にそれぞれ対応する形で、三つのセッションからプログラムが構成されています。各セッションは互いに異なる特徴を持ち、それぞれ個性ある議論が展開されました。

まずシンポジウム冒頭では、井出北極担当大使による基調講演がおこなわれ、北極をめぐる安全保障と国際的な研究協力ネットワーク作りにおいて日本に期待されている役割と、それを促進していく上で日本がとるべき北極政策の路線が示されました。

北極域における近年の国際関係をテーマとする第一セッションでは、三人の国際関係論の専門家が、それぞれネットワーク理論、ロシアの軍事政策、北極をめぐる具体的な組織づくりといった、互いに異なる視点から北極のガバナンスにアプローチする報告をおこないました。国際的な組織では国家の枠組みがどのように機能するか、またそこに権力がどのような形で働くかといった問題に関心が集まりました。

さらに第二セッションでは、石油開発事業、文化人類学、政治学と、互いに異なるジャンルで活躍する研究者が、近年石油・天然ガス開発の著しいヤマル半島という共通の事例を取り上げて、それぞれ独自の視点から分析した発表をおこないました。グローバル資本の集ま

る資源開発の現状と、先住民のローカルな生活環境のあり方の双方から、それぞれ専門的な知見のあいまみえる形となった本セッションには、会場からもその組織を高く評価する声がありました。

二日目におこなわれた第三セッションでは、北米とシベリアをフィールドとする文化人類学者三名が、地球は「人新世」(anthropocene)と呼ばれる新たな地質学の時代に入ったと言われる現代に共通して取り上げられるべき問題について、報告をおこないました。その中で、科学知と在来知の協働・共鳴を背景として、生物多様性および文化的多様性、人と動物の互恵的關係といったテーマを通して、単一ではなく多様であることの意味を改めて捉え直すべきという共通のメッセージが浮かび上がりました。

二日間を通じて62名(のべ92名)におよんだ参加者の中には、学術研究者のみならず、政策決定者や産業界の事業関係者が含まれました。異なる分野で活動する者同士が、それぞれの視点から北極に関する共通のテーマについて意見を交わすことによって、単なる学際的な学術交流ではなく、よりプラクティカルな次元に踏み込んだ議論が可能となりました。さらにそこから反省的にとらえ返すことによって、異なる次元を結び、相互理解のための道筋をつけるという、本事業において人文社会科学の研究者に期待されている役割について、より明確なビジョンが示されたように思います。[後藤]

### ◆ ボーダースタディーズ福岡シンポジウム「北東アジアの危機と岐路」 ◆ 開催される

1月27日、九州大学箱崎キャンパスにて、九州大学アジア太平洋未来研究センター(CAFS)主催、NIHUとUBRJ共催で、ボーダースタディーズ福岡シンポジウム「北東アジアの危機と岐路」が開催されました。はじめに渡邊公一郎氏(九州大学副理事)と張済国氏(東西大学総長・釜山)の挨拶がありました。



シンポジウムのようす

シンポジウムは3つのセッションに分かれ、最初に「福岡で北朝鮮問題を考える」と題する特別シンポジウムをおこないました。

その後、セッション1は「北東アジア:米中日露の角錐?」と題し、岩下明裕(CAFS・センター)が登壇しました。第2セッションでは、「北東アジアの未来を考える」と題し、未来の危機と岐路について議論されました。

これまでのUBRJ主催行事の中でもっとも「未来の可能性や希望」的な方向性が強く出た行事であり、40人を超える参加者が活発な議論を展開しました。円滑なシンポジウムの進行のために奮闘してくださった、CAFISの皆様へ感謝申し上げます。[プル]

### ◆ 2018年度「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした ◆ 総合的研究」に関する公募結果

昨年度と同様に、「プロジェクト型」の共同研究、「共同利用型」の個人による研究、センターが設定した課題による「共同研究班」の班員の募集をおこないましたが、2017年12月10日の共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会において応募者を審査した結果、以下の方々が採択されました。[編集部]

## 2018年度採択者一覧

## 1「プロジェクト型」の共同研究

	申請者氏名 (代表者)	所属機関・職	研究課題名
1	志田 仁完	公益財団法人環日本海経済研究所・研究主任	辺境地の経済開発：極東地域の事例
2	醍醐 龍馬	大阪大学大学院法学研究科・助教	外交官から見た近代日露関係史
3	永山ゆかり	北海道大学大学院文学研究科・助教	シベリア先住諸民族の言語資料から見た社会と親族
4	道上 真有	新潟大学経済学部・准教授	ロシア・中国市場移行国の住宅市場・住宅政策の特殊性に関する研究：ロ中およびロ中と先進諸国比較

## 2「共同研究班」の班員

	申請者氏名	所属機関・職	テーマ
1	岡野 要	京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程・大学院生	②スラブ・ユーラシアにおける言語接触・言語圏に関する共同研究
2	川久保文紀	中央学院大学法学部・教授	③スラブ・ユーラシア地域を中心とする境界・国境研究
3	佐藤嘉寿子	帝京大学沖永総合研究所・助教	④スラブ・ユーラシア地域における「ポストネオリベラル期」の経済政策比較
4	吉村 貴之	早稲田大学イスラーム地域研究機構・招へい研究員	①近現代の中央ユーラシアに関する共同研究

## 3「共同利用型」の個人による研究

	申請者氏名	所属機関・職	研究課題名
1	大槻 忠史	群馬大学・非常勤講師	1920-30年代のロシア経済学と日本の経済学：A. N. アンツィフェロフを中心に
2	河本 和子	中央大学法学部・非常勤講師	ソ連における労働と財産：ジェンダーの観点から
3	塩谷 哲史	筑波大学人文社会系・助教	ヒヴァ・ハン国をめぐる奴隷解放交渉過程の研究
4	巽 由樹子	東京外国語大学 大学院総合国際学研究院・講師	メディアとしてのエルミタージュ美術館：現代ロシアの文化政策と文化機関の自律性との関係について
5	野部 公一	専修大学経済学部国際経済学科・教授	1950年代のシベリア農村の社会・経済的変動に関する研究
6	日臺 健雄	和光大学経済経営学部・准教授	戦時経済下のソ連における市場メカニズムの機能：第二次大戦期のコルホーズ市場
7	藤沢 潤	神戸大学大学院人文学研究科・特命講師	ソ連のコメコン政策とユーラシアの冷戦
8	前田 しほ	人間文化研究機構・研究員／島根県立大学・研究員	旧ソ連都市構造と戦争記念の空間について
9	村知 稔三	青山学院女子短大子ども学科・教授	体制転換後のロシアとベラルーシにおける子どもの生活と権利に関する比較研究

## ◆ プルフォード氏の滞在 ◆

英国出身の人類学者エドワード・プルフォード氏が日本学術振興会特別研究員として、センターに滞在中（2017年11月～2019年10月の予定）です。主な研究テーマは中国・ロシア・朝鮮のボーダー、社会主義国の外交、北東アジアの先住民、外国にいる中国人の消費者です。中国とロシアに滞在した後、ケンブリッジ大学において2017年に博士号を獲得しました。博士論文のテーマは、ロシアと北朝鮮のボーダーにある中国の小さな村において、歴史や「友情」といった対人関係および政治関係がどのような意味を持つか、ということについてです。プルフォード氏の趣味は90年代のアメリカのパワー・ポップ音楽を聴くことと、ノッティンガムフォレストサッカーチームを応援することです。[ブル]

## ◆ 専任・助教・非常勤研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、専任研究員セミナー等が以下のように開催されました。

11月22日：仙石学「東欧におけるポピュリズムとネオリベリズム：ヴィシエグラード諸国の事例から」

コメンテータ：小川有美（立教大学）

今回は、ポピュリズムのグローバル化とその中でスラヴ・ユーラシア地域の位置を考える絶好の機会になりました。提出されたペーパーは、ポーランド、ハンガリー、チェコ、スロヴァキアという隣接した諸国におけるポピュリズムの発現形態の違いを、ネオリベリズムへの反応の違いで説明しようとするものでした。それは、各国でポピュリズムが何を「敵」にしているのかを明確にする論考でもありました。北欧政治を専門とされる小川先生からは、比較政治研究の模範的な論考であるという高い評価があり、ヴィシエグラード諸国の特徴を見極めつつ、さらに比較研究の地平が拡大していくことに期待が寄せられました。その上で、ネオリベリズム的な経済政策が社会主義体制を克服する過程で世界的に見ても急進的に進められ、それへの抵抗からポピュリズムを煽る政党が生まれているという説明は明快である一方で、経済政策論と政党制度論との接合に無理はないか、といった指摘がありました。全体の議論でも、ポピュリズム拡大の背景として格差の拡大（中間層の弱体化）があるとすれば経済についてもっと論じる必要があるのではないか、「東欧」という地域設定はこの論文で妥当か、また、政党政治と歴史的記憶との関係、キリスト教的価値観とポピュリズムとの関係など、多岐にわたる問いが出されました。[長縄]

11月30日：長縄宣博「1905年革命とロシア・ムスリム：公共圏の出現と権威の変転」

コメンテータ：宇山智彦（センター）

提出ペーパーは、小松久男編『1905年：イスラーム地域の波動（歴史の転換期第10巻）』（山川出版社）に収録予定のもので、ロシアのムスリムにとって政治的活動の始まりであった1905年革命について、1905～1907年におけるそうした活動の背景などを明らかにしようとするものでした。討論では、報告者が重視する公共圏あるいは公共空間という概念に関して、権威との関係、社会の分断との関係、排除される人々、社会運動等々の観点から、様々な意見や質問が出ました。さらに、ロシア・ムスリムという概念、日露戦争との関係、同時代の立憲革命との関係などについても活発な議論がなされました。[田畑]

12月14日：ウルフ・ディビッド “The Other Side of the Map: Russia’s Great War and Revolution from a Northeast Asian Perspective” (with Willard Sunderland)

コメンテータ：長縄宣博（センター）

今回のペーパーはウルフ氏が編集した論文集 *Russia's Great War and Revolution in the Far East: Re-Imagining the Northeast Asian Theater, 1914-1922* (Slavica Publishers: Bloomington, Indiana, 2017) の序章に当たるもので、第一次世界大戦からロシア革命および内戦にいたる時期に、ヨーロッパロシアとは異なる展開を示したロシア極東の政治および経済の動向を、隣接する北東アジアの状況とも関連させながら整理したものでした。コメンテータの長縄氏はこのペーパーを高く評価した上で、このペーパーとセンターの帝国主義研究や境界研究との関係、ペーパーにおける「緩衝国」の位置付け、極東ロシアにおけるウクライナ移民の存在とその意味、および論文集における日本人の執筆者の比重の高さなど、多面的な視点からのコメントをおこないました。議論ではこの時代の後の時代へのインプリケーションや、東アジアにおける共産党の形成と当時のソ連の動向の関連、北東アジアとヨーロッパとの間の比較および相互関係、大戦から革命・内戦の連続性に関する当事者の認識などの論点が提起されました。[仙石]

1月26日：野町素己 “Another Look at the Rise and Fall of the West Polesian Literary Microlanguage (with a Glance toward Less Discussed Ukrainian Factors)”

コメンテータは三谷恵子教授（東京大学）の予定でしたが、大雪で飛行機が欠航となり、札幌に来ることができませんでした。報告者は、言語そのものについての研究と社会言語学の研究を進めているということで、今回提出されたものは、後者に分類されるものでした。これまでに専任研究員セミナーに提出されたもののなかでは、一番読みやすかったというのが、社会科学分野の参加者からの共通の意見でした。今回のペーパーは、西ポレシエ語という小さな言語の形成に関わるもので、その標準的な書き言葉の形成がどのように始まり、失敗に終わったかを描いたものでした。この形成は、ミコラ・シリャホヴィッチという人物によって推進されたものだったので、この人物の評伝のような趣もあるものでした。討論においては、この言語の性格（ウクライナ語に近いのか、ベラルーシ語に近いのか）やこの人物の主張やウクライナ、ベラルーシ、ロシアとの関係などについて様々な質問が出ました。[田畑]

1月29日：田畑伸一郎「第7章 財政」（田畑朋子と共著）『アジア長期経済統計 ロシア巻』東洋経済新報社から近刊予定

コメンテータ：中村靖（横浜国立大学）

本稿は、帝政ロシア、ソ連、現代ロシアの財政統計（国家予算統計）を連結可能な形で処理して、200年以上にわたる歳入・歳出の動態を示そうとしたものでした。近年の資料公開の進展によって、不明なのは数年にすぎないというのは驚くべきことです。得られたデータからは、帝政期において間接税に占める酒税の割合が70-90%もあったこと、1970年代以降の「対外経済活動税」が石油輸出の増大に牽引されていたこと、そして財政赤字が克服されたのは2000年代に入ってからにすぎないことなど、多くの重要な事実を読み取ることができました。『ロシア巻』の執筆者でもあるコメンテータは、通時的に一貫したデータの処理自体に大きな貢献があると認めた上で、提示されたデータから今後何を読み取っていくのかについては多大な可能性が秘められていると強調しました。質疑応答もこの点に関わるものが多くを占めました。歳出には各体制の性格が表れているが、歳入（税制）に特徴を読み取ることが可能か。ソ連と現代ロシアについて国防と治安をどのように分けるのか。同時代の世界の先進国と比べて予算規模自体はどのように評価できるのか。統計を集める目的は時代によって変わるはずだが、その変化が統計にどのような作用を与え、統計処理上どのように留意すべきかなど、興味が尽きませんでした。[長縄]

## 助教セミナー

11月15日：菊田悠「手工芸と軽工業の間で：近現代ウズベキスタンにおける陶業の変遷」  
コメンテータ：藤本透子（国立民族学博物館）

提出されたペーパーは、ウズベキスタン各地の陶業が20世紀初頭から現在に至るまでのような変遷を経てきたかを、陶器作りの技能の継承あるいは消滅に焦点を絞って考察するというものでした。ソヴィエト政権による産業の社会主義的再編と近代化政策、ソ連崩壊後の経済システムの転換など旧ソ連諸国に共通する問題とともに、近代的な工場制度や技能研修システムと徒弟制の共存あるいは対立、イノベーションと伝統の両立の模索といった世界共通の課題をも視野に入れたものでした。コメンテータからは、手工芸、技能の継承・消滅・変容、国家との関係、観光業との関係・影響などについてコメントが出されました。その後の討論では、ウズベキスタンにおける3種類の比較の軸や歴史の記述の仕方などを巡って様々な意見が出されました。[田畑]

1月18日：油本真理「プーチン政権と混合体制のジレンマ：『全ロシア人民戦線』の利用を事例として」

コメンテータ：溝口修平（中京大学）

今回のペーパーは、混合体制のジレンマに対処するために形成されるフォーマルな制度の「代替物」に関して、ロシアにおいて「統一ロシア」の機能不全に対処するため、2011年の下院選挙の直前に形成された人民戦線を事例として分析をおこなったものでした。コメンテータの溝口氏はこのペーパーの意義を、政治制度のフォーマル・インフォーマルの関係性をめぐる研究、および人民戦線の体系的な理解への貢献とまとめた上で、統一ロシアと人民戦線の関係の変化、その変化が体制変容におよぼす影響、および混合体制における代替物の機能・限界の一般化などに関する議論を提起しました。討論では「人民戦線とは何で、誰が支えているのか、また何らかの役割を果たしたのか」という論点が複数の参加者から提示されたほか、権威主義体制論におけるプーチン体制の特質と、そこにおける人民主義の位置づけ、ポピュリズム論やコーポラティズム論との関係、統一ロシアと人民戦線の具体的な関係、統一ロシアの強み、旧ソ連との類似性などに関する議論が提起されました。[仙石]

1月22日：加藤美保子“Liberal Reforms and Conservative Turn in Post-Soviet Russia: Dissolution and Resurgence of the Security Apparatus”

コメンテータ：山添博史（防衛省防衛研究所）

提出ペーパーは、日露トランスフォーメーションプロジェクト研究会なるもので報告され、最終的に *One and a Half Centuries of Great Transformation in Russia and Japan* という本の第12章として収録される予定ということでした。ソ連崩壊後のロシア治安機関の変遷を描こうとするもので、ロシア外交一筋だった報告者のこれまでの研究対象とは異なるものであり、また、当初リベラルだったのが途中から保守化したというような枠組みが与えられているようで、執筆に苦労されたことがうかがわれました。チェチェン戦争の影響をもっと考慮すべきであるといったコメントが出たほか、治安機関の政治的な位置付け、エリツィン政権との関係などに関して、多くの質問が出ました。[田畑]

1月25日：後藤正憲“Farming in the Process of Arrangement in Russian villages”

コメンテータ：加藤敦典（京都産業大学）

提出されたペーパーは、コメンテータが編者を務める小泉潤二大阪大学名誉教授の記念論集に収録予定のものでした。ペーパーでは、チュヴアシとサハというロシアの2つの地域における農業システムの転換の比較がおこなわれていて、コメンテータは、文化人類学者クリフォード・ギアツの代表作『行商人と王子』における2つの都市の比較を想起させるものだと指摘さ

れました。そのうえで、2つの地域における違いの説明が経済偏重になっているので、より文化人類学的に説明することができないかという注文を出されました。討論では、チュヴァシの事例はフェルメルの中なかでも特殊ケースではないかとか、技術を重視することの解釈などについてコメントが出ました。また、政府からの補助がなければやっていけず、政治と経営の間のネットワークが重要となっているサハの事例についても多くの質問が出ました。[田畑]

1月30日：高橋沙奈美「はじめに」、第1章、第2章『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観：社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナリズム』

コメンテータ：松井康浩（九州大学）

コメンテータが急病で来られず、司会がコメントを代読する形でセミナーがおこなわれました。提出ペーパーは、報告者の博士論文をもとに執筆され、北海道大学出版会から刊行予定の『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観：社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナリズム』に収録される「はじめに」と第1章、第2章の原稿でした。討論のなかで、報告者がもっとも書きたかったことは、ソ連愛国主義とは何だったのかという問題であり、愛国主義と言えば、宗教でもナショナリズムでも認められてしまうような後期社会主義期の状況を描きたかったということが述べられました。コメンテータからは、理論的フレームワークとして、アレクセイ・ユルチャクの議論にどのように対峙するのか、後期社会主義をどう理解するのかという大きな質問が出され、その後の議論のなかでも、こうした問題や信者、信仰、世俗主義などをめぐる問題、さらには、序章の書き方、本の構成などについてもいろいろな意見が出ました。[田畑]

#### 非常勤研究員セミナー

12月25日：宗野ふもと「ソ連期ウズベキスタンにおける手工芸の社会主義的生産体制と女性の労働：シャフリサブズ『フジュム』芸術製品工場の事例から」

コメンテータ：村上薫（アジア経済研究所）

提出されたペーパーは、2016年に刊行されたディスカッションペーパーをもとに、2017年9～10月におこなわれたフィールドワークの成果を取り入れて、改稿したものでした。ウズベキスタン南部のシャフリサブズ市に位置し、ドゥッピ（民族帽子）や絨毯を生産する「フジュム」工場を題材とし、そこで働いた人々への聞き取り調査を中心に据えた意欲的な論文でした。ソ連期における手工芸の社会主義的生産体制の改編過程を明らかにすることと、女性工場労働者にとっての社会主義的生産体制の下での労働がいかなる経験であったのかを考察することが目的とされていました。女性解放と労働力の確保の側面の対抗関係、当局の狙いと働き手の思惑の対応関係、ソ連全体の話と中央アジア特有の話との切り分け、近代化一般とソ連特有の経験との関係など、論文で描かれた多面的な変化をどうとらえるべきか、そして、どう論文にまとめるのがよいかについて、多くの意見が出されました。[田畑]

1月12日：神竹喜重子「ラフマニノフと銀の時代」

コメンテータ：千葉潤（札幌大谷大学）

提出ペーパーは、博士論文「ロシアにおけるセルゲイ・ラフマニノフ受容：19世紀末から20世紀初期の音楽批評を中心に」の第5章を改稿したものであるということでした。ただし、第5章のタイトルは、「ヴェチャスラフ・カラトウイギンによるラフマニノフ論」というもので、内容的にはカラトウイギンによるラフマニノフの批評に関するものであり、彼がラフマニノフを非難した理由やその背景を説明したものでした。コメンテータからは、カラトウイギンの批評的立場の位置付けがなされていないことや、論述の重心がカラトウイギンとスクリャーピンに置かれていて、ラフマニノフ批判の重要性が薄れているといった問題が指摘されまし

た。討論では、こうした音楽の文化史論的位置付けや大衆による受容との関係などについて質問やコメントが出されました。[田畑]

### ◆ 研究会活動 ◆

ニュース 151 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[大須賀]

- 11 月 17 日 **Aisulu Khairuldayeva** (アルファラビ・カザフ国立大・院) “Современная казахстанская историография про взаимоотношения Казахстана с Кокандским ханством в XVIII - первой половине XIX вв.”; **Kuanysh Murzakhojayev** (同) “Образование джадидского движения в Казахстане” (センター特別セミナー)
- 11 月 28 日 **斎藤慶子** (センター) 「バレエ『まりも』とソ連のバレエ普及政策 (デカーダ)」(NIHU / UBRJ セミナー)
- 11 月 30 日 **Camillo Breiling** (ウィーン大、オーストリア) “The Lipovans: Russian Old-Believers as a Religious, Cultural and Linguistic Minority in the Romanian and Ukrainian Part of the Danube-Delta” (昼食懇談会)
- 12 月 1 日 **Yonghui Li** (中国社会科学院) “Cooperation under the One Belt One Road and the Eurasian Economic Union” (UBRJ セミナー)
- 12 月 2 日 北海道中央ユーラシア研究会 **藤森信吉** (センター共同研究員) 「ロシアは気前がいいパトロンなのか? 未承認国家問題再考」
- 12 月 6 日 Pre-symposium Workshop “Wars and Transformation of Social Order: Russia’s Conquest of Central Asia and the Caucasus” **長沼秀幸** (カザフ国立大) “Kenesary Revolt and Its Consequences, 1837-1868: Reconfiguration of Kazakh Society and Russian Rule”; **野坂(佐原)潤子** (ビルゲント大、トルコ) “‘Divide and Conquer’ in the North Caucasus under the Imperial Russian Rule, 1850s-1860s”; **Azim Malikov** (センター) “‘Holy Groups’ in Samarkand Province: Social and Cultural Transformations, 1868-1917”
- 12 月 10 日 「スラブ・ユーラシア地域を中心とした総合的研究」プロジェクト型共同研究報告会 **三谷恵子** (東京大) 「中世スラヴテキスト分析の方法研究: テキスト間影響関係からのアプローチ」; **阿部賢一** (東京大) 「『シレジア』の文学史記述に関する横断的研究」; **高山陽子** (亜細亜大) 「社会主義の記憶とノスタルジア: 旧ソ連・東欧・中国・ベトナムの比較から」
- 12 月 14 日 **Assel Bekebasova** (カザフスタン東洋学研究所・院) 「イブラヒム・アルトゥンサリンの啓蒙思想に関する一考察」(センター特別セミナー)
- 12 月 22 日 第 23 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 **野町素己** (センター) 「変わる言語とアイデンティティ: カナダのポーランド系移民を題材に」
- 1 月 11 日 **大野成樹** (旭川大) 「米国の伝統的・非伝統的金融政策がロシアの金融市場に与える影響」(客員研究員セミナー)
- 1 月 24 日 **松澤祐介** (西武文理大) 「ユーロ圏の中欧 3 カ国への〈非拡大〉」(客員研究員セミナー)
- 1 月 27 日 研究会「日系企業のロシア事業戦略」**徳永昌弘** (関西大) 「日系企業とロシア語圏市場: 北極圏から中央アジアまで」; **菅沼桂子** (日本大) 「日系企業のロシア進出状況とロシアビジネスに係る諸問題」; **松本おかり** (神戸国際大) 「ロシア進出企業: 医療産業を中心に」
- 1 月 31 日 センター特別セミナー: ユーラシアの地政学 **Dosym Satpaev** (リスク・アセスメント・グループ、カザフスタン) “Вызовы для Центральной Азии: гибридные угрозы и мягкая сила”; **Aleksandr Gabuev** (カーネギー・モスクワセンター、ロシア) “Поворот России к Азии при Путине 4.0: чего ожидать?”
- 2 月 2 日 **Richard Giragosian** (地域研究センター、アルメニア) “A Region at Risk: Dynamic Trends in the South Caucasus” (センター特別セミナー)
- 2 月 7 日 セミナー「北極域をめぐる国際関係・安全保障環境の変化～今、北極で起きていること」**齊藤孝祐** (横浜国立大) 「北極域における米国の安全保障戦略とグリーンランド: 米国はグリーンランドに何を期待したのか」; **高橋美野梨** (センター) 「グリーンランドと米国: グリーンランドは米軍基地とどう向き合ってきたのか」; **川名晋史** (東京工業大) 「北極域の安全保障環境を理解するために: 沖縄を参照しながら」

# 人事の動き

## ◆ 事務職員 ◆

新任紹介：亀田望 事務補佐員（事務室）〔事務係〕

## 心に残る「北の海の道」

ダンコ・シプカ（アリゾナ州立大学／センター 2017 年度特任教授）



今回スラブ・ユーラシア研究センターの職員、外国人研究員、友人の皆さんに私の札幌滞在の印象を書く機会を頂きました。まず、私が言いたいことは、札幌滞在中にホスト教員を引き受けていた野町さんに、私は仕事でもプライベートでも大変お世話になったということです。そして、SRCのプロフェッショナルで親切なスタッフの皆さんにもとてもお世話になりました。皆さんに心からお礼申し上げます。

浜離宮恩賜庭園で抹茶を楽しむ著者、リリー夫人、野町さん 私はかつてからSRCの学術的に高い評判に関心を持っていました。また日本文化の魅力も、仕事とプライベートの双方において、とても重要な要素でした。私の研究計画が採択されたのは、実に幸運でした。私を採用してくださった皆様、また必要な資金を提供してくださった北海道大学にも感謝したいと思います。

私は、言語学では、どちらかといえば、一風変わった、あるいは一般的にあまり重要と思われぬ点に関心を持っています。様々な言語や文化が共有する特徴ではなく、むしろ各言語の固有的な特徴を明らかにする研究をしてきました。私が現在進めている研究プロジェクト——それは札幌で取り組んでいたものでもありますが——スラブの文化的アイデンティティの語彙的階層の研究、つまりスラブ諸語を文化的に特徴づける語彙の研究です。豊富な蔵書および優れた研究者が集うSRCは、私が研究遂行するにあたり理想的な環境でした。スラブ語研究に取り組む日本人研究者の視点をすることも、私の研究に対する視野を広げてくれました。日本人研究者と私を結びつけてくださった野町さんには、この点でもお世話になりました。特に重要だったのは、東京では三谷恵子教授、京都では服部文昭教授にお目にかかったことで、実りの多い議論を行なうことができました。また、東京と札幌で企画された私の講演会では、出席者の皆さんから有用な助言を得られましたが、これも大変貴重な経験となりました。研究者は、ややもすれば自分の研究伝統の枠に偏りがちになりますが、今回の滞在を通じて、他の伝統を持つ研究者の視点を持つことは、私の研究プロジェクトの視野を広げるのに大変重要なことでした。SRC滞在は、私の進みが遅かった研究プロジェクトに実に多くの刺激を与えてくれました。おかげで、私はプロジェクトの成果である著書の初稿を、

帰国後3カ月で書き上げることができました。

人間の公生活と私生活は分かち難く繋がっていると私は強く思います。その繋がりは私たちが意識していない時も確実に存在します。札幌滞在を思い返すと、私の心の目にそのすべてが鮮やかに蘇ります。札幌での生活は、仕事だけではなく私生活においても、とても画期的なものでした。私生活は、いっそう楽しい時間になりました。なぜならば、幸いなことに、この時期を妻のリリーと共有することができたからです。高校生の馴れ初めの時から、彼女とあらゆる体験を共有してきました。当初は、妻は異なる文化社会で生活することを少し心配していましたが、来日してすぐに日本での生活を楽しめるようになりました。彼女は日本での生活をフェイスブックに書き込むなどをして、世界中のあらゆる友達を喜ばせていました。もちろん、私も日本の生活を十分に楽しむことができました。

日本でまだ生活したことがない人々、あるいは既に生活していて、日本の環境に慣れてもう当然だと思っている人々は、私たちがこんなに興奮していることに戸惑うかもしれません。ですから、なぜ日本にとっても魅惑されたのか、その理由を説明しようと思います。

まず豊かな自然に感銘を受けました。日本海で泳ぎましたし、北海道の最高峰・旭岳にも登りました。美しい火山、温泉、湖などの景色を楽しみ、充実した週末を送りました。訪れたところはどこも大変美しく、感動しました。人間が自然に手を加えた場所も少なからず印象的でした。例えば、イサム・ノグチ氏の広大なモエレ沼公園や安藤忠雄氏による素敵なラベンダーに囲まれた大仏殿、札幌市内とその周囲にある様々な公園はどれもが素晴らしかったです。一見平凡な建造物にも見える大倉山スキージャンプ競技場でさえ、彫像のようにしっくりと自然に組み込まれているのです。

次は至る所にある豊かな文化遺産です。京都や東京の寺社仏閣、御所、離宮、城郭を見て、大変な感動を覚えました。しかし、白老のアイヌ博物館や北海道神宮も劣らず印象的で、特に華やかな七五三の行事は魅力的でした。また、新幹線やあらゆる種類の自動販売機、アニメや漫画といった新しい文化伝統にもとても魅了されました。小樽などで、まさに漫画から飛び出てきたような格好をした若者を何回か見ましたが、それも大変印象的でした。

その次は社会とその社会に住む人々についての印象です。犯罪、暴力、貧困がほとんど存在しない社会で住んでみるのは特権的な感じがしました。他人への配慮というものが社会の重要かつ包括的な原則であり、この原則が中心となり社会が組織されているように思われました。それは至るところで目にできます。例えば公共交通機関の中では携帯電話を使わないといったことから、対話者を批判して不快に思わせない気配りに至るまで、沢山あります。日本人の親切、礼節、謙虚は文字だけの偽りのものではなく、真に日本人の精神に宿っているように思われました。

最後に食生活について少し書いてみます。もし日本文化が完全に平和主義ではなかったとしたら、私はそのために死んでもいい、あるいは誰かを殺してもいいと思うほど素晴らしいと言っていたかもしれません。日本食の新鮮さと美味しさは（幸いなことに、日本は遺伝子組み換え食品の実践にまだ抵抗しています。日本はこれを将来長きにわたって守っていくことを期待します）、これまで世界中を旅した私と妻をもってしても、これまで全く体験したことがないと言わしめるものでした。私たちはいろいろな和食を試してみました。ふぐ鍋、しゃぶしゃぶ、すき焼きといった高級料理から、たこ焼き、焼きそば、焼き鳥といった庶民の味まで、実に楽しみました。計算しつくされた調理方法、様々な種類のレストラン、豊富なメニュー、あらゆる点で圧倒的な印象を受けました。とりわけ、大概世界どこでも値段が高く、選択肢が少なく、美味しくもないレストランばかりが想起される空港でさえも、日本の場合は市内のレストラン同様種類が豊富で、かつ普通の値段で、充実した食事ができることは、私たちにとって嬉しい驚きでした。

簡単にまとめますと、私の日本滞在は単に研究プロジェクトの発展以上の意味を持ちました。私と妻にとって人生観を一変させるような経験でした。この経験は、社会を組織する文明的な方法、人々の、そして人々と自然の美しい共存の方法について開眼させてくれました。我々に決まった考え方を強制するような脅威を孕むグローバル化の波に負けずに、独特な文化が存続していることに最も感銘を受けました。いつかまた来日し、妻と一緒に今度は富士山にも挑戦したいと思っています。それまでの間は、富士山をとっても美しく描いた北斎の『富嶽三十六景』を見て楽しむことにします。

もっとも、後悔することがなかったわけではありません。それは私が札幌で経験できた、あるいは経験できなかったことに関してではなく、札幌に来る前に日本語をもっと熱心に勉強すべきだったということです（私は平仮名カタカナ、基礎漢字、基礎語彙と表現しか覚えていませんでした。つまり、日本語の知識はほとんどゼロでした）。そのため、今秋に日本語クラスに参加し、取り戻したいと思っています。しかし、私の日本語知識が初歩的で、不十分であったにもかかわらず、私と妻に滞在する特権が与えられた、素晴らしい島の名前は読むことができました（「北の海の道」、すなわち北海道という島の名称は、とても相応しいものだと思います）。そして、この島は、人間性、人間の精神としての優しさ（あるいは人間の心、すなわち日本人の重要な概念を現す様々な言葉の印である「心」が文字通り意味するように）へ導いてくれた「道」でした。ですから、このエッセイを「心に残る『北の海の道』」と名付けました。

（英語からミルラン・ベクトルスノフ訳、野町監修）

## 私の人生における日本と、日本での私の生活

セルゲイ・クズネツォフ（イルクーツク国立大学／  
センター 2017 年度特任教授）



著者 札幌の円山公園で

2017 年春、私は北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターによる長期招へい研究員に採用されて日本へ行く幸運に恵まれました。全 10 カ月の快適な研究室・蔵書環境の中で、以前手をつけかけて諸々の理由で放棄していた多くの文章に本腰を入れて完成させ、また、前々から構想していた日本人の在ロシア外交官たちの来歴に関する執筆に落ち着いて取り組む機会を得ました。これについては、以前は空想するばかりだったのです！6月1日の時点で、私は札幌に飛びました。私は春か初夏に日本を訪れるのが好きです。なぜなら、活気づく自然と共に、人生の方でも新しい周期が始まり、ありとあらゆる最高に面白く重要なものがこれから先に待ち受けているように思われるからです。

どんな歴史家もそうですが、私は身の回りや生活で起こった出来事を記録する習慣があります。

数えてみると、今回の私の日本訪問はすでに 25 回目であると分かりました。なんと奇妙な、記念すべき訪問です！もちろん、何が不思議かと一笑に付す方もいるでしょうが。私にとっ

て日本の訪問の一回一回は、たとえ短くともとても大事なのです。

私が初めて日本を知ったのはいつだったのでしょうか。言い切るのは難しいです。おそらく1964年に、学校の先生が私たち生徒に向けて、遠く見知らぬ東京でオリンピックが開催されるのを話したときだったと思います。興味を持った私は、家に帰ると大ソビエト百科事典の「T」の文字を掴みました。無味乾燥で形式ばった「東京」の項目は私の気に入っていませんでした。その百科事典には、おきまりの「労働と資本」の階級闘争といった記事以外



札幌での生活を楽しむ著者とその家族

は期待できないのですから。当時のソビエト連邦における日本に関する情報は、ごく僅かであったと言わざるを得ません。まだインターネットはなく、国営テレビや新聞は、出来事について、公的なプロパガンダの見解のみを伝えていました。冷戦は継続中であり、東京以外に聞いたことがあった日本の都市は、広島と長崎の二つだけでした。1964年東京オリンピックの頃までに、東京では世界一の高さのテレビ塔が建設され、人工衛星を介した競技の中継が初めて行われ、世界初の高速鉄道である新幹線が開通しましたが、これらを何年も経てから我々は知ったのです。同様に、東京オリンピックが日本の再生と急激な先進国化の到達点、および象徴であることを、かなり後になって我々は理解しました。とはいえ、この劇的な事件に満ちた時代は、現代とのある種の類似が感じられる出来事が多く生まれていたにもかかわらず、長いことその後の急展開の陰に隠れていました。例えば、1964年の東京において、東ドイツと西ドイツは統一選手団として出場しました。ドイツは2020年の東京でも統一して出場するでしょうし、すでに一つの国としてのみ現れるでしょう。

不思議なことに、私の初の日本旅行はオリンピックと結びついていました。1980年のモスクワ・オリンピックです。周知のように、日本は他の多くの国と同様に、ソ連のアフガニスタンへの軍事介入を理由にオリンピックをボイコットしました。オリンピックの宣伝を目的に、ソビエト当局はいくつかの青年巡航団を西側の国々に派遣しました。その中の一つは日本に向かったのですが、私はそこのスタッフの一員だったのです。1980年5月、私達はディーゼル船に乗ってナホトカを出港し、2週間で、長崎、東京、大阪、広島、清水、小樽を巡りました。そのとき私は初めて札幌に訪れました。当時の印象はいまでも鮮明に残っています。帰国後、私は大学で勉強を続け、その後レニングラード大学の大学院へ進学しました。おそらく当然の成り行きで、日本は私の研究テーマになり、学位論文では第二次世界大戦後の英日関係に関して書きました。こうして日本は私の人生に入り込み、単に学問の対象となったのみならず、強烈な力で引きつけてくる磁石のように情熱の対象になったのです。相変わらず80年代半ばまでは、現代的でアクチュアルな日本の情報は乏しく、それは特にロシアの地方において顕著でした。印刷物のうち、新聞販売のキオスクで購入できたのはロシア語で書かれた雑誌『日本の写真』と、社会党の雑誌『社会新報』のみでした。他の日本の定期刊行物は本格的な研究書などはもちろんのこと、モスクワやレニングラードといった大都市の図書館でのみ手にすることができました。ソビエトのメディアはときに極めて否定的な、あるいは議論の余地ある情報を伝えました。例外はおそらくV. オフチニコフとV. ツヴェトフという二人のジャーナリストでした。彼らはレポルターージュにおいて全く別種の、等身大の

日本をソビエトの人々に巧みに提示しました。日本とその国民をポジティブな視点から見せたのです。

知られているように、80年代中ごろまでにソ連における日本の現代史や国際関係の研究分野では、公にも内々にも優先度が高い研究課題群の大枠ができあがっていました。それは日本の非武装化や、日本、アメリカ、西欧諸国の帝国主義者間の対立、資本主義の全般的な危機を背景にした日本経済内の危機的な現象、日本の労働者の権利闘争（「春季」と「秋季」闘争）などでした。当然ながら、この潮流に地方の歴史家たちは従いました。その際、彼らには一定の困難が立ちほだかりました。研究成果の出版の困難さと、資料の入手しづらさです。特



旧札幌警察署南一条巡査派出所（北海道開拓の村）の建物前で

に大学院生にとって、中央の出版所で刊行できる可能性は熾烈な競争のせいで限られていました。外国に関連する資料を地方で発行する際は、いかなる試みにおいても外務省に属するしかるべき部署からの許可が求められました。資料に関して言えば、すでに述べたように、それらは首都の図書館にのみ集中していました。こうした事情すべてが世界史の問題を扱う地方の歴史家の著作の増大を阻害し、彼らの学位論文の準備期間を引き延ばしていました。

80年代の後半は、ソビエト国内の生活に信じられないほどの変化をもたらし、昨日まで空想と思われていたものがあつというまに現実となりました。我々と日本の研究者とのやり取りは急激に拡大し、古文書館は開放され、多くの新しい研究テーマが生まれました。80年代末には、1945年にソ連とモンゴルで抑留された日本の戦争捕虜に関するテーマも現れました。私はこれに最初に取り組んだロシアの歴史家の一人となりました。もちろん、偶然の要素はありましたが、研究者の勘も何かを嗅ぎとったのです。1991年春にミハイル・ゴルバチョフ大統領が海部俊樹首相にソ連で亡くなった日本人のリストを手渡したときまでに、我々はソ連国内におけるかつての捕虜が埋葬された場所に関するほぼ全ての情報を得ていました。多くの目撃者はまだ生きており、彼らに対する多数の取材は真相を伝える資料を豊富に与えてくれました。我々はイルクーツク州、チタ州、ブリヤート共和国内の40年代に強制収容所であった跡地を、つまり、それと不可避の付随物である抑留者の墓地があった場所を巡りました。それらの多くは、例えば「グラークの首都」の地域であるタイシェトのように鬱蒼としたタイガのなかにありました。中にはイルクーツクやブラーツクの水力発電所の建設後に水底に沈んだものもありました。数多くの日本の派遣団が、40年代にそこで亡くなった親族や親しい人々の墓を訪れようという一途な情熱を秘めてシベリアの我々のもとにやって来たとき、私は初めて自分の研究が肌を感じられるような現実上の利益をもたらしているのを実感しました。彼らはしばしば埋葬地の情報を何も持たずにやって来ました。1992年、私は『イルクーツク地方における日本人戦争捕虜の墓地』と題した英語表記の地図を企画・出版し、1年後には金沢でイルクーツク地方で埋葬された日本人のリストを出版しました。こうした出版が親族を探す多くの人々の助けになったことを願っています。そして古文書館での調査、シベリア全土の現地視察、多数の日本の代表団との接触が組み合わさり、本格的な学問上の方向性が定まってきました。1994年、私は1945-1956年のソ連における日本人抑留をテーマ

にした博士論文の口頭審査をパスしました。それはロシアで初めて当問題を扱った学位論文になったのです。あるとき捕虜のテーマに取り組むロシア人研究者の成果を総計したことがありました。すると現在に至るまでロシアでは14の記録・資料・写真集、41の基礎のしっかりした研究書が刊行され、29の修士・博士論文が通過、210以上の学術論文が出版、300以上の学術会議・シンポジウムにおける口頭発表がなされ、400以上の日本の捕虜に関する政治・社会評論、新聞記事が世に出たことが分かったのです。自然の流れであります。現在では1945-1956年のソ連における日本人戦争捕虜や抑留者の問題はかつての緊急性を失いました。事件の生きた証人はそれほど多く残っておらず、世代は交替しました。ソ連初代大統領ミハイル・ゴルバチョフの東京訪問の後や、数年後のロシア大統領ボリス・エリツィンによる抑留者に対する不当な扱いへの謝罪の後に、この問題は部分的に取り下げされました。他方、シベリアと極東で亡くなった多数の日本人に関する記憶は、認識できない現象として歴史に残されたままで、現在の世代にも懸念を与えています。おそらく、双方向から悲劇的といえるこの歴史の一部は、最終的に空白のページを残さなくなったときにのみ、初めて過去へと去るでしょう。

(ロシア語から上村正之訳)

## 学 界 短 信

### ◆ 学会カレンダー ◆

- 2018年3月24-25日 2017年度日本中央アジア学会年次大会 於KKR江ノ島ニュー向洋  
<http://www.jacas.jp>
- 4月13-15日 BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) 2018年次大会 於フィッツウィリアム・カレッジ ケンブリッジ大学 <http://www.basees2018.org>
- 6月9-10日 第58回比較経済体制学会全国大会 於北海道大学  
[http://www.jaces.info/site\\_news\\_files/2017-12NO59.pdf](http://www.jaces.info/site_news_files/2017-12NO59.pdf)
- 6月23-24日 2017年度日本比較政治学会第21回大会 於東北大学 <http://www.jacpnet.org>
- 6月30日～7月1日 スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンファレンス“Globalization and Modern Eurasia: History, Trends, Challenges for Change” 於ウランバートル [http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jcrees/text/Revised\\_Call\\_For\\_Papers\\_EAC%20IX-1.pdf](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jcrees/text/Revised_Call_For_Papers_EAC%20IX-1.pdf)
- 7月2-5日 2018 HOPS-SRC Border Studies サマースクール 於スラブ・ユーラシア研究センター  
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/ubrij/eng/events/archives/201807/18070205.html>
- 7月5-6日 スラブ・ユーラシア研究センター夏期国際シンポジウム
- 7月10-14日 第2回ABS (Association for Borderland Studies) 世界大会 於ウィーン、ブダペスト <http://www.abs2018world.com/presentation/news/call-for-papers-borders-and-boundaries-in-asia/>
- 10月25-28日 第19回CESS (Central Eurasian Studies Society) 年次大会 於ピッツバーグ大学  
<http://www.centraleurasia.org/annual-conf>
- 12月6-9日 50th Annual ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention 於ボストン <http://www.aseees.org/convention>
- 2020年8月4-9日 ICCEES 第10回大会 於モントリオール <http://iccees.org/>

[編集部]

## 図書室だより

### ◆ ロシア語児童書コーナーを開設 ◆

センターは毎年のように外国人研究員を迎えています。お子さん連れで滞在される方もいます。また、外国人留学生で、お子さんがいる方もいます。こうした方から、外国語児童書について相談されることがありましたが、これまで提供できる資料は多くありませんでした。

そこでセンター図書室では、とりあえず、札幌では入手しにくいが一定の需要が見込まれるロシア語の児童書について、徐々に整備し、センターに滞在する教員の子女をはじめ、北海道大学内の教職員・学生の子女を対象にサービスを提供することにしましたので、お知らせします。現在、ここにある本はわずか10冊に過ぎませんが、今後継続的に整備を進める予定です。[兔内]

### ◆ 旧吉野悦雄研究室資料について ◆

吉野悦雄氏は、北海道大学経済学部・経済学研究科で長く仕事をされた、ポーランド・リトアニアの農業経済の専門家であり、『ポーランドの農業と農民：グシトエフ村の研究』（木鐸社、1993年）、『複数民族社会の微視的的制度分析：リトアニアにおけるミクロストーリー研究』（北海道大学図書刊行会、2000年）などの著書があります。2013年春に退職され、名誉教授となりました。

センター図書室は、吉野氏が北海道大学を退職なされるに当たって関係者からお話をいただき、研究室に残置されていた資料から、今後、役立ちそうなものをこちらで選び出すことになり、わずか数日の間でしたが、ポーランド、リトアニアのほか、隣接するベラルーシ、ウクライナの経済関係資料2400冊余りを研究室から運び出しました。特に、共産主義体制が終焉した20世紀末から21世紀初めの統計は非常に充実したもので、ポーランド国外ではなかなか見られない水準のように思われました。

その後これらの資料について、北大の所蔵資料と照合した上でリストを作成し、附属図書館の資料として受入れ手続きをお願いしたところ、昨年中に一部を除いて、ほぼ整理が完了しましたので、お知らせ申し上げます。また、この件についてご協力いただいた附属図書館関係者のみなさまに、お礼申し上げます。[兔内]

### ◆ 雑誌記事データづくり継続中 ◆

センターニュース No. 146 (2016.8) で、雑誌記事の目録づくりをしていることをお伝えしましたが、その後、以下の雑誌について作業をおこないましたのでお知らせします。

- 『ソ連問題研究』1～5号 (1952年)
- 『ソ連研究』6号～9号、2巻1号～11巻8号 (1952～1962年)
- 『満蒙経済事情』1～24号 (1916～1920年)
- 『満蒙之文化』1巻1号～第4年32号 (1920～1923年)
- 『哈爾濱商品陳列館館報』1～8号 (1919～1920年)
- 『露亞時報』9～158号 (1920～1932年)
- 『亜細亜時論』1巻1号～5巻8号 (1917～1921年)

これらの目次データは、皓星社のデータベース『ざっさくプラス』に収録されるほか、ご希望の方には別途提供させていただきます。[兔内]

## 編集室だより

### ◆ スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 10 ◆

#### *Central Europe Through the Lens of Language and Politics: On the Sample Maps from the Atlas of Language Politics in Modern Central Europe*

Tomasz Kamusella, Motoki Nomachi, and Catherine Gibson, eds.

#### の刊行

上記の報告集が刊行されました。本研究報告集は、2011年度外国人研究員であった Tomasz Kamusella 氏を中心になった、ヨーロッパの地政学の観点による言語地図です。第1部は本人によるプロジェクト概要および外部研究者・共同研究者による批判的検証、第2部は言語にかかわる様々なテーマによる地図の試作です。賛否両論はあるかと思いますが、言語をめぐる学際的研究の有効性を示す一例だと思えます。Kamusella 氏はセンターと連携し本共同研究を今後も継続する予定です。[野町]

[http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicntn/slavic\\_eurasia\\_papers/no10/index.html](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicntn/slavic_eurasia_papers/no10/index.html)



### ◆ スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 11 ◆

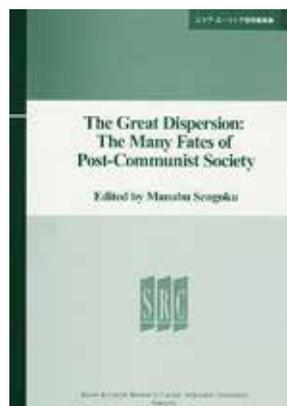
#### *The Great Dispersion: The Many Fates of Post-Communist Society*

Manabu Sengoku, ed.

#### の刊行

上記の報告集が刊行されました。本報告集は、2016年12月8～9日にセンターで開催された冬期国際シンポジウム「体制転換から四半世紀：ポスト共産主義社会の多様化を比較する」のセッションの中で、科学研究費補助金「ポストネオリベラル期における新興民主主義国の経済政策」に関連する2つのセッション（「ポスト共産主義社会における家族と国家」および「ネオリベリズムとその敵：ポスト共産主義国をめぐる戦い」）の成果をまとめたものです。東欧およびロシアにおける体制転換後の家族政策の展開、およびネオリベラル的な経済政策の浸透について、比較の観点から検討をおこなったペーパーが収められています。[仙石]

[http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicntn/slavic\\_eurasia\\_papers/no11/index.html](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicntn/slavic_eurasia_papers/no11/index.html)



◆ 『スラヴ研究』 ◆

第 65 号には 9 本の投稿がありました。現在、査読・審査を終え、修正稿が提出されているところですが。[長縄]

◆ *Acta Slavica Iaponica* ◆

現在、3 月刊行を目指し、39 号の編集作業を進めています。掲載決定論文は 5 本、現時点で掲載可否未定で改訂中のものが 1 本で、採択率は約 40%となりました。書評は様々な分野から 12 本が掲載されます。なお、次号の締め切りは 2018 年 7 月 13 日です。どうぞ奮ってご投稿ください。[野町]

会 議 (2017 年 11 ~ 12 月)

◆ センター協議員会 ◆

2017 年度第 4 回 11 月 17 日 (金)

- 議題
1. 研究生の受入 (新規) について
  2. 教員の人事について

◆ センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会 ◆

2017 年度第 1 回 12 月 10 日 (日)

- 議題
1. 共同研究・共同利用公募課題の審査について

◆ センター運営委員会 ◆

2017 年度第 2 回 12 月 10 日 (日)

- 議題
1. 共同利用・共同研究公募について
  2. その他

[事務係]

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース 151 号以降のセンター訪問者 (客員、道央圏を除く) は以下の通りです (敬称略)。  
[仙石/大須賀]

11 月 15 日 藤本透子 (国立民族学博物館)

11 月 22 日 小川有美 (立教大)

11 月 30 日 Camillo Breiling (ウィーン大、オーストリア)

12 月 1 日 Yonghui Li (中国社会科学院)

12 月 5 日 塩谷哲史 (筑波大)

12 月 6-8 日 Kamran Asdar Ali (テキサス大、米国)、Oliver Bast (パリ大、フランス)、Hourri Berberian (カリフォルニア大、米国)、David Brophy (シドニー大、オーストラリア)、William Chase (ピッツバーグ大、米国)、Aminat Chokobaeva (オーストラリア国立大)、Samuel Hirst (ビルケント大、トルコ)、Peter Holquist (ペンシルバニア大、米国)、Sean McMeekin (バード大、米国)、Nikolay Mitrokhin (プレーメン大、ドイツ)、Anna Sokolova (モスクワ民族人類学

- 研究所、ロシア)、Zbigniew Wojnowski (ナザルバエフ大、カザフスタン)、秋田茂 (大阪大)、秋山徹 (早稲田大)、池田嘉郎 (東京大)、雲和広 (一橋大)、小松久男 (東京外国語大)、佐原徹哉 (明治大)、塩谷哲史 (筑波大)、Yaroslav Shulatov (神戸大)、巽由樹子 (東京外国語大)、鶴見太郎 (東京大)、中山大将 (京都大)、長沼秀幸 (カザフ国立大)、野坂 (佐原) 潤子 (ビルケント大、トルコ)、橋本伸也 (関西学院大)、藤沢潤 (神戸大)、藤波伸嘉 (津田塾大)、前川一郎 (創価大)、松井康浩 (九州大)、湯浅剛 (広島市立大)、吉村貴之 (早稲田大)
- 12月10日 阿部賢一 (東京大)、大島美穂 (津田塾大)、窪田順平 (総合地球環境学研究所)、黒木英充 (東京外国語大)、高倉浩樹 (東北大)、高山陽子 (亜細亜大)、豊川浩一 (明治大)、中村唯史 (京都大)、三谷恵子 (東京大)
- 12月11-12日 Andrei Golovnev (ピョートル大帝記念人類学民族学博物館、ロシア)、Arbakhan Magomedov (ウリヤノフスク国立大、ロシア)、井出敬二 (外務省北極担当大使)
- 12月25日 村上薫 (アジア経済研究所)
- 1月18日 溝口修平 (中京大)
- 1月21日 野部公一 (専修大)
- 1月22日 山添博史 (防衛省防衛研究所)
- 1月24日 醍醐龍馬 (大阪大)
- 1月25日 加藤敦典 (京都産業大)
- 1月27日 菅沼桂子 (日本大)、徳永昌弘 (関西大)、松本かおり (神戸国際大)
- 1月28日 梅村博昭
- 1月29日 中村靖 (横浜国立大)、野坂 (佐原) 潤子 (ビルケント大、トルコ)
- 1月31日 Aleksandr Gabuev (カーネギー・モスクワセンター、ロシア)、Dosym Satpaev (リスク・アセスメント・グループ、カザフスタン)、輪島実樹 (ロシア NIS 経済研究所)
- 2月2日 Richard Giragosian (地域研究センター、アルメニア)
- 2月7日 齊藤孝祐 (横浜国立大)

### ◆ 研究員消息 ◆

兔内勇津流研究員は、11月5日～12日の間、史料調査及び研究打合せのため、ロシアに出張。

野野素己研究員は、11月6～19日の間、“49th ASEEEES Annual Convention” 出席、研究報告、“Slavic Grad Colloquium” 出席、研究報告及び研究打合せのため、カナダ、米国に出張。11月30日～12月17日の間、研究打合せ、意見交換、現地調査及び資料収集のため、オーストリア、フィンランドに出張。1月7～20日の間、現地調査及び資料収集のため、クロアチアに出張。

長縄宣博研究員は、11月8～14日の間、“49th ASEEEES Annual Convention” 出席、研究報告及び研究打合せのため、米国に出張。

越野剛研究員は、11月8～14日の間、“49th ASEEEES Annual Convention” 出席及び研究報告のため、米国に出張。1月17～22日の間、国際シンポジウム出席及び研究報告のため、ドイツに出張。

田畑伸一郎研究員は2017年11月8～14日の間、“49th ASEEEES Annual Convention” 出席、研究報告及び意見交換のため、米国に出張。11月18～22の間、第7回 ETH Zurich ジョイントシンポジウム出席などのため、スイスに出張。11月26～29日の間、“COPERA Scientists Meeting” 出席、研究報告、意見交換及び事前打合せのため、ロシアに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は11月9～17日の間、“49th ASEEEES Annual Convention” 出席、研究報告及び資料収集のため、米国に出張。12月18～30日の間、資料収集のため、米国に出張。

宇山智彦研究員は11月22～27日の間、国際会議 “Enlightenment and Modernisation Movements in Turkic World: Alash’s Centennial” 出席及び研究報告のため、トルコに出張。12月17～20日の間、国立政治大学国際シンポジウム “Political and Social Developments in Russia and Eurasia” 出席、研究報告及び研究打合せのため、台湾に出張。

仙石学研究員は12月22日～2018年1月10日の間、資料収集のため、ポーランド、ドイツに出張。[事務係]

## 目 次

研究の最前線.....	1
2017年度冬期国際シンポジウム《ロシア革命と長い20世紀》開催される／北極域研究推進プロジェクト(ArCS)の国際シンポジウム開催される／ボーダースタディーズ福岡シンポジウム「北東アジアの危機と岐路」開催される／2018年度「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」に関する公募結果／ブルフォード氏の滞在／専任・助教・非常勤研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き.....	10
事務職員	
心に残る「北の海の道」 by ダンコ・シプカ.....	10
私の人生における日本と、日本での私の生活 by セルゲイ・クズネツォフ.....	12
学界短信.....	15
学会カレンダー	
図書室だより.....	16
ロシア語児童書コーナーを開設／旧吉野悦雄研究室資料について／雑誌記事データづくり継続中	
編集室だより.....	17
スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 10 の刊行／スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 11 の刊行／『スラヴ研究』／ <i>Acta Slavica Iaponica</i>	
会議(2017年11～12月).....	18
センター協議員会／センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会／センター運営委員会	
みせらねあ.....	18
人物往来／研究員消息	

---

2018年2月26日発行

編集	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	仙石 学
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： <a href="http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/">http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/</a>

---